

北谷幸册先生哀悼の言葉

現在もそして長く同じ職場に勤める同僚のひとりとして、お別れの言葉を申し上げます。北谷先生、先生はまさに忽然として逝かれた。残された私たちは驚きと悲しみに戸惑うばかりです。

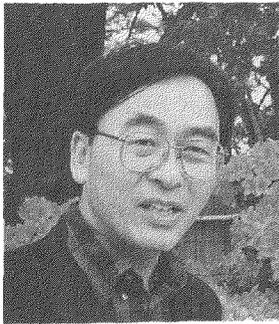
先生と私が出会いましたのは、二十年程前、私が相愛女子短大に勤めた時でした。万葉集を熱心に教えておられる評判の先生として知りました。以来、親しいお付き合いが始まりましたが、このような形で永訣の日を迎えるとは思いませんでした。

この四月、本山参拝の後、学科の教員全員で京都嵐山に遊びました。春の雨の一日でしたが、嵐山の山桜が満開で、山肌をたちのぼる霧に、匂いこぼれるように咲いておりました。その美しさに、私が一期一会の景色ですと申し上げると、先生は静かに笑っておられました。嵐山の桜をご一緒に見ましたが、最期でした。

先生は、万葉集の研究を一生の仕事にしておられました。代表的なふたつの著書も万葉集に関するものです。万葉ゆかりの地を歩き、マイクを手に語りかける先生の姿、万葉の碑の建立に力を注がれたことなど、あれやこれや思い出されます。

しかし、まだまだ、やり残されたことは多かったです。

今年のはじめころだったでしょうか、難波の書店で偶然、先生に出会ったことがあります。絵本売場に立っておいででした。幼いお孫さんのために選んでおられた



のです。

ひごろ、老いた父上の様子を心配されてもおられました。

亡くなられた十六日の晩、私はご自宅に伺い、病院から帰られた先生を奥様とお迎えしましたが、先生はきちんとスーツを着ておられました。入院の後に作られたスーツで、これを着て教室に復帰するのを支えに、頑張っておられたと聞きました。しかし、お元気で袖を通すことなく逝されました。

先生は五十七歳という若さで逝されました。この世にどれほど多くの思いを残されたままか。しかし、どうか安らかにお休みください。私たち一同、悔しさを乗り越え、先生の遺志を継いでいきたいと存じます。

献身的に尽くされた奥様はじめ御遺族に心より哀悼の意を捧げ、お別れの言葉といたします。
さようなら、北谷先生。

鈴木徳男

〈付記〉

平成十二年六月十六日、むし暑いころでした。二十年の長きにわたり本学にお勤めでありました北谷幸册教授の訃報に接したのは。春から入院と聞き、教職員、学生皆早い復帰を願っておりましたが、その願いも空しくなりました。学科一同、衷心よりご冥福を念じあげ、本誌巻頭において、遺影とお別れのことばとをかかげる次第であります。

なお、右の文章は同十八日の葬儀に学科を代表して鈴木が捧げたものです。